

●マイハート		
◇個性を生かして「調和」を生む	萩野谷英成……	2
●連載／道徳と他教科・領域の関連・連携を考える③		
◇特別活動・キャリア教育との連携	藤田晃之／岡田千穂／高橋 純／加藤宣行……	3
●特集／導入—教科化の趣旨から考える		
◇道徳の教科化の趣旨を生かした		
導入・展開・終末・発展の類に関する研究	新宮弘識……	7
◇子どもの中に「問い」を生み出す導入	谷口雄一……	11
◇道徳の教科化に伴う授業を考える ～導入を中心に～	原 英子……	13
●リレー連載／デジタル道徳を活用した授業		
◇「楠井さんの思いと児童の学びをつなぐ」		
—5年「助け合い傘」の実践を通して—	古見豪基……	15
●連載／道徳授業の「落とし穴」⑥		
◇道徳授業の「あたりまえだけど大切なこと」	土田雄一……	16
●連載／心に残る道徳授業		
◇子どもの言葉を生かして授業をする	加藤宣行……	17
●連載／道徳の授業で学級が変わる③		
◇「ルール」と「リレーション」で学級を変える	竹井秀文……裏表紙	

本文中の勤務校は平成27年11月現在のものです。



個性を生かして 「調和」を生む

クラシックギタリスト

萩野谷 英成



小さいときから音楽はずっと好きでしたが、中学時代は運動部に入っており、思ったように音楽ができませんでした。ですから、高校では音楽をやろうと決めていました。入学した高校に、偶然、クラシックギターのアンサンブル(合奏)をする部活動があり、楽しそうな雰囲気ひかれて入部しました。そこでクラシックギターのとりこになり、大学でも続け、今につながっています。

プロを目指すことを決めたのは、ギターが好きで、人を楽しませたり、幸せにしたりすることにかかわりたいと思ったからです。私は、音楽を世界共通の言語で優れたコミュニケーション手段であり、平和や心の豊かさの象徴の1つだと思っています。音楽家としてそれを普及させていくということは、とても意義のあることだと感じています。

現在の活動の大きな軸は、レッスンと演奏活動です。

レッスンの際は、その人が目指しているものを大事にすることを意識しています。少し厳しめに言う程度で叱ることはほとんどありません。きちんと心を込めて伝えれば、相手に伝わると信じているからです。そして、問題があったときには解決策をいっしょに考えます。

演奏活動では、ソロ以外にも「クアトロ・パロス」というクラシックギターのためのカルテット(4人組のユニット)での活動もしています。常にプロとして、お客様に楽しかった、感動した、と満足していただくとともに、ギターの魅力を伝えられるような演奏を心がけています。

活動の中では壁にぶつかることもあります。「難しいフレーズがある」というような技術的な問題は、なぜ難しく感じるのか、^{うんし}運指がおかしくないかなど、原因を探して解決します。カルテットのメンバーと意見がぶつかったときにも、根本的な原因を追究し、相手のこだわりを理解するよう努めます。どんな問題にも必ず理由があるはずなの

で、それを根本から解決することがいちばん大事だと思っています。

ソロの活動には、自分の思うとおりに世界を作り出せるおもしろさがあります。しかし、2人以上で行うアンサンブルにも全く違う魅力があります。それは、1人だと「1」でしかないものが、他の人たちがいることでさまざまな要素がかけ合わされ、「1+1+1+……」といった単なる足し算ではなく、それ以上のものになるところです。

アンサンブルでは息を合わせることに、「調和」が大切です。そして、そのためにはみんなの気持ちを一致させることが必要です。実際に弾いてみたり、言葉で意見交換したりして、演奏する曲のイメージを共有します。そうすると、自然とテンポなどもそろってきます。

しかし、カルテットでは、4人の異なる方向性を調和のために無理やりそろえることはしていません。優しい音が出せる、攻撃的な音が出せる、といったそれぞれの個性を大切に、それを武器にしています。違うことをよしとするバランスのとり方もあるのです。

人間関係も音楽活動と似て、個々の特性を認め合い、お互いに納得した上で、調和するにはどうすればよいか考えることが大切です。いろいろな人とコミュニケーションをとり、最初は相いれなかったとしても、拒絶するのではなく、見方を変えたり、いろいろな方法を試したりすると、よいバランスのとり方が見つかると思います。

「違うことはよいこと」だと思います。自分と違うことを否定するのではなく、「みんな違うこと」のよさを大切にしたいです。(談)

はぎのや・ひでなり クラシックギターを小林 徹に師事。ギターソロの他、デュオや、カルテット「クアトロ・パロス」、他楽器とのアンサンブルなどで広く演奏活動を行い、多くの作曲家の新作初演も手がける。一般財団法人ヤマハ音楽振興会認定講師、公益社団法人日本ギター連盟正会員、日本ギター合奏連盟常任理事、ギター重奏コンクール審査員。

好評発売中!



『実践から学ぶ 深く考える道徳授業』

子どもが変わる! 授業が変わる!
「深く考える道徳」授業のススメ!!

- ◆加藤宣行・竹井秀文 編著
- ◆定価 本体2,300円+税
- ◆B5判/160ページ
- ◆ISBN: 978-4-7706-1065-2

ご注文は弊社販売代理店、または書店まで。

編著者による
授業のポイント
解説DVD付き!

『道徳授業ハンドブック』

～道徳の“内容”をどのように考えるか～

『道徳授業ハンドブック2』

～子どもの目が輝く道徳の授業をどのようにつくるか～

- 新宮弘識 著
- 定価 本体477円+税
- A5判/64ページ

購入については、下記にお問い合わせください。
03-3262-3270 光文書院 営業グループ



■「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をぜひお寄せください。

弊社 web ページ「お問い合わせ」コーナー <http://www.kobun.co.jp/contact/>

道徳と他教科・領域の関連・連携を考える③

～特別活動・キャリア教育との連携～

筑波大学・教授（特別活動・キャリア教育） 藤田 晃之

群馬大学教育学部附属小学校（道徳） 岡田 千穂

神奈川県相模原市立千木良小学校（道徳） 高橋 純

（聞き手）筑波大学附属小学校（道徳） 加藤 宣行

加藤：今回は、「特別活動（以下特活）」「キャリア教育」との関連・連携を考えるということで、藤田先生、岡田先生、高橋先生にお越しいただきました。藤田先生には専門家の立場から、岡田先生と高橋先生には実践者としての立場から、お話を伺っていきたいと思います。

■問題解決的な学習とは？

加藤：道徳の教科化にあたり、いくつかのキーワードが出ていますので、それらをもとに考えていきたいと思っています。まず、「問題解決的な学習」がクローズアップされていますが、特活の中での問題解決的な学習というのはあるのですか。

藤田：子どもたちは、自主的、実践的な活動を通して学級や学校生活をつくっていく際に、その経験の中で矛盾や解決すべき課題に出会います。それらを議題として取り上げ、話し合い活動をするというのが、基本的な学級活動の形です。そうすると、問題解決的な学習や活動というのが、特活の中核的な役割、機能であるとも見てよいくらいの重要性をもっていると思っています。

加藤：なるほど。道徳教育ではどうですか。

高橋：問題意識をもっていないと、どう考えてよいのかが生まれてきません。授業においても、子どもたちがどのような問題意識をもって考えているかということがポイントになります。そういう意味では、問題解決というのは有効な方法だと思います。

岡田：道徳教育における問題解決というのは、子どもたちが普段見過ごしがちなことを、教師からの投げかけによって揺さぶり、興味関心を引き出すという意味があると考えています。道徳の授業の中で、「ここをもっと考えてみたい」という問題意識を子どもがもった時に、そこがスタートとなり、具体的な実践の場としての特活へとつながるのではないのでしょうか。道徳教育は教育の中で

中核的な役割を担うものですが、そう考えると、問題解決的な学習というのは、道徳の時間に一つのきっかけを貰った子どもたちが、その先に学びを広げていくものであると思います。

加藤：特活と道徳教育は有機的・機能的に融合できるし、それが必要だということですね。道徳や特活、他教科・領域など、すべてが包括されてくるというようなイメージでしょうか。

藤田：道徳教育は、すべての教育活動を通して行うものですね。キャリア教育も同じですが、「通して」行うとミックスされ、究極的には峻別することが困難にさえなります。たとえば、「学級をつくる」「規則正しい生活をする」などは、道徳でもあり特活でもある。目指す方向性は同じですから、非常に密接な関連性をもっていると理解してよい気がしますね。

加藤：子どもを育てるという目標においては、これは道徳、これは特活という線引きはもちろんなく、教育活動全体の混然一体としたものの中で、子どもたちが生きた学びをしていければいいですよ。では、週1時間の道徳の時間はどうあるべきなのか。極端な話をすれば、混然一体となって道徳的観点も深めていけるなら、道徳の時間は不要ということにもなりませんか。

岡田：子どもたちが「きっかけをつくる時間」「考える場」として、道徳の時間は必要だと思います。やはり、場がないと子どもは考えることが難しい。ただ、藤田先生のお話を伺っていて、計画的に、行事や教科・領域の関係を把握した上で、今ここでこの授業、この観点で学びを深めていきたいという教師の目的意識が非常に大事だと思います。

高橋：たとえば、道徳で6年生の「愛校心」を扱った時に、その行事を受け継ぐということそのものにスポットを当てるのか、受け継がれてきた思

いや願いにスポットを当てるかといった、それぞれの教科・領域のねらいがあると思います。混然一体とはしていますが、特活や道徳の特性に応じて、子どもに投げかけていくべきことなのかなと思います。

岡田：よくわかります。たとえば、遠足があるから「思いやり・親切」、「信頼・友情」の授業を行うなど、生徒指導的に道徳の時間を使う先生もいらっしゃるかと思いますが、それはちょっと賛成しかねるんです。連携させることは非常に大事だと思いますが、それはその実践の場を保証するという意味の連携です。子どもたちが「こうしたい」と思った時に、それを実現する場。そのような場として、特活があり、学校行事があるという位置づけで考えていけるとよいと思います。

加藤：遠足などの活動をうまく生かすために道徳で指導をするのではなく、意図的・計画的に、ねらいとする価値に向かう気づきを得られるような体験の場を組むということですか。

岡田：道徳の時間に問題意識をもち、子どもたちが「こうしたい」と思う。でもそれはもしかしたら机上の空論かもしれない。それを普段の生活や、学級活動などを通して実践してみる。道徳も、他教科・領域と同じように実際にやってみることで学びが深まることは多いと考えています。

藤田：実際の生活の場は、様々な背景や条件が折り重なっていますから、その中でいきなりものごとを考えるのはすごく大変です。道徳の読み物資料は、子どもたちに考えさせたいポイントを抽出し、考えやすいような状況を設定して書かれているので、それを使いながら、気づかずにいた問題、見過ごしていた問題に出会わせていく。それは、道徳の時間との往還がないとできないのではないかと思います。気づかなかった問題、見過ごしていた問題を「道徳性」というキーワードの中で気づいていき、その上で学級でのリアルな問題を考えてみようとなっていくのではないのでしょうか。

■体験的学習の意味

加藤：では、道徳の授業の中に体験をとり入れるというのはいかがでしょうか。面白い新聞記事があったので持ってきました。読みますね。「〇〇」の学習で、高齢者の感覚を疑似体験した。（略）疑似体験を通して、高齢者への配慮や思いやりが大事であると考えようになった。高齢者の大変



▲岡田先生



▲藤田先生

さを理解し、社会全体で支えていくことが大切だと思う。「思いやりが大事」というのは道徳教育、「社会全体で支えていく」というのは、キャリア教育だったり、特活だったりしますよね。ではこの疑似体験は何の授業なのか。これを道徳の時間にやったほうがよいのか。どう考えますか。

藤田：私は道徳の時間に行うのはもったいない気がします。道徳で学んだことが、特活や総合的な学習の時間、他教科に生かされると同時に、そこで学んだことや体験を、今度は道徳で振り返ることによって、気づかずにいた価値や道徳性に改めて気づいていくわけだから、今の例などは別のところで学習して、それを振り返ればよいと思います。

高橋：体験を通して、なぜそれに価値があるのかということ深く考えたり、共有したりするという場が道徳だと思うんですよね。体験して「ああよかった、これからこうしよう」というのは、よくわかる。なぜそれが価値のあることで、なぜ自分がそう思い、なぜ仲間とそれを共有できるのかといったことを自分の中で考えて整理し、次に発展させるための場が道徳の時間。そのために道徳の時間というのは必要なのだと思います。ですから、体験は別の機会に。

岡田：体験をすること自体はとても価値があると思っていますが、それを学びとして醸成するには時間がかかる。体験するだけで終わってしまうなら、道徳の時間は、日常を振り返り、見直しをもつ、思いを膨らます、意欲をもつ時間として位置づけるほうがいいかなと思います。

加藤：この「〇〇」の学習は家庭科なんです。よく特活でも疑似体験が行われますよね。生の体験というのはとても大事で力がある。それを教育に生かせるようにするのが本来なのでしょうが、個別的だったり、偶発的だったりする。それをいかに、学びの土俵に乗せるか。特活では、どのよう

な体験が意図的に組まれているのですか。

藤田：生活づくりとか学級づくりになります。結局、特活で行うのは人間関係形成。子どもに自主的に活動させることが中心なので、価値観やものの見方に深く切り込んでいくという時間的な枠が少ない。そういう意味で、道徳的に見ると特活の限界性というのはあるかなという感じはします。

■読み物資料の「力」

加藤：特活の限界について、もう少し詳しく教えてください。

藤田：自主的、実践的な活動、簡単にいうと、話したり動いたりすることが特活の中核です。行事や児童会といった子どもたちの生活の中から気づきを導き出したい。でも、深いきっかけづくりがなかなかできない時があります。特活で道徳性を深めようとする、どうしても先生が引っ張っていく必要がでてきます。でもそれはやはり、特活ではなく、道徳の時間にやるべきことだと思うんです。その時に、状況を限定して問題を深く考えられるような道徳の読み物資料を提示することで、自分たちの生活の中では気づかなかった問題が鮮明化してくる。だから、私は読み物資料というのはすごく力があると思うんですよ。

加藤：押谷由夫先生(昭和女子大学大学院教授)は、「総合単元的道徳学習」として、「道徳の時間だけでは限界があり、各教科・領域と関連づけて学びを深めていくことで、より効果のある道徳教育を行うことができる」とおっしゃっていたのですが、関連するものを寄せ集めて年間指導計画を立てるのではなく、本当にそれが生きたものになるようにしないといけないということだと思います。キャリア教育とも関連は深いと思うのですが。

藤田：その人のもっている道徳的な価値観がその人の行動を規定するので、道徳教育を抜いたキャリア教育を行ってしまうと、即物的、自己中心的になりかねません。キャリアの側面である経済的な論理と、人間としての在り方や行動規範というのを考えていくと、道徳教育というものがキャリア教育の基盤として位置づきます。小学校でのキャリア教育は、職業や生き方の選択の基盤となる力を身につけること、それこそ、努力や正直、礼儀の大切さということを身につけさせるのが重要なんです。これは、道徳教育の内容項目とほとんど一緒なので、「通して」行う場合の道徳教育

とキャリア教育は、特に小学校では峻別しにくい。違う部分を挙げるならば、その努力や正直ということは大人になっても大切だという気づきを意図的に与えていくというところだと思います。なので、「通して」行う方はほとんど重なってきますが、意図をもって「とり出して」行うキャリア教育というのは少し違ってきます。

加藤：「とり出して」行うというのは？

藤田：子どもたちの将来を見据えて、先生方が意識して行うキャリア教育のことです。キャリア教育は特設時間がないので、どこかの場を借りて行うこととなりますが、「そこでの学びが自らの将来にも生きる」ということに気づかせる実践ですね。

■キャリア教育は生き方教育

加藤：キャリア教育を通して子どもを育てるという時に欠かせない視点として、地域や家庭などとの連携の必要性が書かれていますが、それに関しては、最初からそのようなお考えだったのですか。

藤田：キャリア教育には自分たちが大人になった時のロールモデルが絶対に必要で、それは地域に求めるのが一番自然なんです。地域の方々が一生涯懸命に生きている様に実際に触れると、そこで子どもたちの将来像がより具体的になってきますし、道徳的な価値への再認識が深まってきます。

岡田：道徳の読み物資料も、生き方のロールモデルという位置づけですよね。

加藤：道徳でも、地域の方々や資料の中の人物がロールモデルになり、その人たちを通して学びを深めていきます。そういう観点は、キャリア教育や特活にもあるのですか。

藤田：あります。特に学校行事はそういう要素が強いですし、キャリア教育も同様です。道徳教育でも、地域に学んだり、偉人に学んだりする時に、潜在的にはキャリア教育的な要素があって、それを意識して行うことによってそれが顕在化する。あなたは、今読んだ、今出会ったこの人の生き方についてどう思うか、それをどう生かしていきたいのかという問いを顕在化させる。でも、その問いがないまま道徳教育が終わっている場合があるかもしれない。そこをもっと顕在的にすることが、道徳教育や道徳の時間を通したキャリア教育になるのかなという気がします。

高橋：キャリア教育は、仕事教育ではないんですね。人の生き方のことなんですね。

藤田：仕事教育の部分もなくはないですが、小学校ではその割合は非常に少なく、むしろ、生き様とか生き方とかですね。

高橋：そうすると、仕事だけではなく、地域で何か役割を担っている人、たとえば、仕事をリタイアされた方が地域で活動されていることに触れることも、キャリア教育になりますか。

藤田：そうですね。ちょっと話がそれますが、学校行事などで地域の伝統芸能を学んだりすることがありますよね。その時に、太鼓やお囃子を練習して、運動会などで披露し、拍手喝采されて終わりという実践が結構あるんですね。できるようになるまでには、教えに来てくれた地域の方々がいるわけで、その人たちの思いや、その太鼓やお囃子が地域で果たしてきた役割などにまで気づかせないと、すごくもったいないと思うんです。

加藤：私も、道徳の授業でゲストを呼んで話をさせていただくことがありますが、それだけで終わってしまうのは失礼だと思うんです。むしろそのあとが大事で、今日、学んだものは何かをきちんと話し合い、伝え合う。そこが道徳の授業に必要なキモだと思います。

■「議論する」方向性

加藤：「議論する」というキーワードがあるのですが、話し合いは特活の得意分野ですよね。

藤田：自分たちの生活そのものをつくっていくための話し合いが特活の話し合いです。表面化している問題、克服しなくてはいけない課題、やり遂げなくてはいけないタスクとか、そういう目の前にある課題だけではなく、それをぐっと広げる、視野を広げるようなところの話し合い、というのが必要なのだろうと思います。

加藤：となると、道徳の議論はどこに向かうべきなのかが大事かと思うのですが、いかがですか。

高橋：道徳では、「僕はこう思う」「私はこう思う」という話し合いの中で、人間的なよさを相手に見出し、自分も相手に認められるという中で、よりよく生きるという方向へ練られていくということが大切。パーサスで相手の上をいくというディベート的なものではなく、相手と自分とで何かを見出し、それがよい方向、よい生き方へ向かう話し合いであるべきだろうと思います。

■関連・連携のために大切なこと

加藤：本日は、道徳と特活を、いかに関連・連携



▲高橋先生



▲加藤先生

させていくか、その方向を見据えて話してもらいました。最後に一言ずつ、話し合いを受けて感じられたことをお話ししたいと思います。

岡田：「総合単元的」と考えると、何を中心として考えるか、視点をどこにおくかということが変わるだけで、やはり人間教育というのは、変わらないのだなというのを深く感じました。

高橋：現場で若い先生方を見ると、関連・連携を考えた時に、なかなか俯瞰することが難しかったり、どの方向から見て、どのように考えて進めていくのかということに気づきにくかったりする実態があります。そこはひと工夫もふた工夫もしていかなければいけないと感じました。

藤田：道徳教育の特徴と限界、特活の特徴と限界、お互いに補完していかなければいけないことは当然の理としてあって、総合単元的な道徳というのは避けられないことだと思います。そうなった時に、小学校の先生方には強みと弱みの両方が出てしまう。多くの小学校では、1人の先生が多くの教科や領域を指導するため、もともと総合単元的な視野が備わっているわけで、それは強みです。一方で、それぞれのねらいや特徴を意識しないまま混然と一体化してしまうと、それぞれ光り輝く価値があるにも関わらず、道徳の価値も総合の価値も特活の価値も、なんだかよくわからなくなってしまいう危険性が同時にあります。ですから、小学校の先生方がそれぞれの教科や領域のねらいや特徴などをしっかりと認識なさって、その上で総合的な視野でみていただくということがますます重要になるのかなと感じました。

加藤：おかげさまで、私なりに考えていたことが整理できた気がしています。道徳の教科化にあたってのさまざまなキーワードについてきちんと捉え直して、しっかりと意味のある道徳教育について、発信をしていきたいと改めて思いました。

道徳の教科化の趣旨を生かした 導入・展開・終末・

発展の類に関する研究①



淑徳大学名誉教授 新宮 弘識

はじめに

道徳の授業に関する実践的研究は、道徳が教育課程に位置付けられた昭和33年から今日まで、57年間積み重ねられてきたのであるが、どのような成果を挙げることができたのであろうか。

論語に「温故知新」という句があるが、過去の研究実績を明らかにすれば、新しい道徳の授業のあり方がみえてくるはずである。

道徳の副読本『ゆたかな心—新しい道徳』（光文書院）の「教師用指導書」に示されている展開例を、「どのような導入が行われているか」「どのような展開が行われているか」「どのような終末が行われているか」「どのような発展的活動が想定されているか」という観点から分析して、その

類を明らかにしてみよう。

そうすれば、その成果や問題点が明らかになり、教科化される道徳の授業の改善に寄与できるはずである。

この研究は、1年32事例2年34事例、低学年の合計66事例、3年35事例4年35事例、中学年の合計70事例、5年35事例6年35事例、高学年の合計70事例を分析して、その類を明らかにし、考察したものである。

具体的な事例は、分かりやすくするために修正加筆したものがある。また、具体的事例は、上段から低・中・高の順で記述しているが、具体例のない学年もある。

I. 導入について

(1) 導入の類と具体的な事例

導入の類	具体的な事例
a 経験を想起させたり、道徳的内容に関するキーワードを話し合わせたりして、興味・関心をもたせる導入	<ul style="list-style-type: none"> ・わがままをいったことはありませんか。 ・挨拶にはどのような挨拶がありますか。 ・きまりについて、あなたはどのように思いますか。 ・礼儀正しくできなくて恥ずかしいと思ったことはありませんか。 ・みなさんはどのような生活目標を立てていますか。 ・忠告とは、どんなことだと思いますか。 ・友達と意見が食い違ったことはありませんか。
b 経験を想起させたり、道徳的内容に関するキーワードを話し合わせたりして、問題意識をもたせて教材につないでいく導入	<ul style="list-style-type: none"> ・弱虫といわれたことはありませんか。つぎの話にでてくる人は弱虫かどうかについて考えましょう。 ・だれかにお世話になったことはありませんか。つぎの話にでてくる人は、どんな気持ちでお世話をしているかについて考えましょう。

c 経験想起をカットし、教師が直接問いを示して、教材の読みに入る導入	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと友達がほしいとは思いませんか。友達をつくるには、何が大切かについて、つぎの話を読んで考えましょう。 ・自分が立てた目標を実現する秘訣は、何だと思いますか。もっとよい秘訣があるかについて、つぎの話を読んで考えましょう。 ・勇気とはどんなことだと思いますか。つぎの話を読んでくわしく考えましょう。 ・友情とはどんな心でどうすることだと思いますか。自分の考えと比べながらつぎの話を読みましょう。
d 経験想起をカットし、最初に教材を読ませて、話し合いたい問題を意識させる導入	<ul style="list-style-type: none"> ・つぎの話を読んで、友達をたくさんつくる秘訣について考えましょう。 ・つぎの話は、魚の命が危ない話です。だれかがどんなことを考えて助けるかな。考えながら読みましょう。 ・学びと遊びとの違いについて、つぎの話を読んで考えましょう。 ・挨拶は何のためにするかについて、つぎの話を読んで考えましょう。 ・つぎの話の電話のかけ方は、みなさんと違うところがあります。何が違うかを考えて読みましょう。 ・誠実について、つぎの話を読んで考えましょう。
e 教材に出てくる代表的な人物や事物を示して興味・関心をもたせる導入	<ul style="list-style-type: none"> ・つぎの話を読んで、話し合いたい問題をつくりましょう。 ・つぎの話を読んで、どのようなことをみんなで考えたいかを見つけましょう。
f その他	<ul style="list-style-type: none"> ・みなさんは、きつねを知っていますね。つぎの話はきつねがでてくる話です。 ・これは救急車の写真です。つぎの話は、救急車の話です。読んでみましょう。

(2) 導入に関する考察

1. 経験の想起による導入について

- ① 調査結果の「a 経験を想起させたり、道徳的内容に関するキーワードを話し合わせたりして、興味・関心をもたせる導入」がこれに相当する。この類の導入は、低学年・中学年・高学年ともに活用度は高い。
- ② ところでこの導入は、導入に時間を費やしたくないから簡単にすませようとして、子どもが、「このことをぜひ考えたい」とする学習意欲を高めることができず、想起された経験がつぎの展開前段にどのようなつながっていくかが明確ではないものが多いように思われる。中には、形式的な経験想起に止まるものも多い。
- ③ 学習活動を子どもの側から考えた場合、ある活動が終わればその活動が、必然的につぎの活動を生んでいくというように、活動に連続性がなければならない。学習には子どもの側からみた学習のストーリーがなければならないのである。
- ④ この点からこの導入を考えた場合、教科化の改正趣旨の一つである、「子どもが主体的な学習をはじめの出発点」ともいえるべき導入になり得るかという疑問が生まれる。

2. 問題を意識させる導入について—その1

- ① 主体的かつ積極的な学習を期するには、子どもが問題意識をもって学習に参加することが大切である。子どもに問題意識を抱かせる第一の方法として、調査結果の「b 経験を想起させたり、道徳的内容に関するキーワードを話し合わせたりして、問題意識をもたせて教材につないでいく導入」が考えられる。
- ② 調査結果によれば、この導入の活用度は、「a 経験を想起させたり、道徳的内容に関するキーワードを話し合わせたりして、興味・関心をもたせる導入」と比べると低い。もっと重視すべきであろう。
- ③ ただし、この活動は、経験の想起から問題の意識化まで、相当の時間を要するという問題点があるとともに、教師の相当の指導力が問われる。

3. 問題を意識させる導入について—その2

- ① 問題を意識させる導入の第二の方法として調査結果の「c 経験想起をカットし、教師が直接問いを示して、教材の読みに入る導入」が考えられる。
- ② この導入は、的確な問題を示すことができるだけでなく、短時間にすませることができるという特長がある。しかし、教師が問いを示すわけであるから、慣れるまではじめの段階における子どもは、このような導入に対し受け身であるという問題点もある。
- ③ このことは、与えられた「問い」を話し合っていくうちに、しだいに子どもの自身の「問い」になっていく。それを考えれば、大きな問題ではなからう。
- ④ この方法は、中学年・高学年はもとより、低学年において、おおいに活用できるように思われる。

4. 問題を意識させる導入について—その3

- ① 問題を意識させる導入の第三の方法として調査結果の「d 経験想起をカットし、最初に教材を読ませて、話し合いたい問題を意識させる導入」が考えられる。
- ② この導入は、低学年には不向きであるが、中学年以上は効果的であろう。最初は、うまくいかないだろうが、回を重ねるごとに適切な問題を導出できるようになる。
- ③ ここで大切なことは、子どもが考えたいと思う問題が、必ずしも道徳的な問題ではないことである。ここに、教師の指導力が問われるが、事前に子どもが導出しそうな問題を予測して、道徳的観点から検討しておくことが大切である。

5. 人物や事物を示して興味・関心をもたせる導入について

- ① 調査結果の「e 教材にでてくる代表的な人物や事物を示して興味・関心をもたせる導入」がこれに相当する。
- ② この導入の活用度は、低学年・中学年・高学年ともに10%程度であるが、提示された人物や事物に対する興味・関心だけで、道徳的内容に関する意識がどれほど喚起されるかという問題がある。

次号特集「展開編」に続く。

子どもの中に「問い」を生み出す導入



和歌山市立松江小学校 教諭 谷口 雄一

1. はじめに

今回の改正では、これまでとは違う「考える道徳」や「議論する道徳」への転換を迫られている。教科化に向けて注目されている問題解決的な学習やアクティブ・ラーニング、また、これまで多くの先生方が大切にしてきた登場人物の心情理解に重きを置く授業展開など、授業のスタイルには様々ある。しかし、その全てにおいて大切にしたいのは、それにより子どもが何を学ぶのかという「ねらい」である。

「ねらい」は、我々にとって授業の展開を考えていくためのものとなる。と同時に、学びの主体である子どもにとっては、自己を見つめ、よりよく生きていくためにはどうすればよいのか、何が大切なのかといったことを考え、議論していくための道しるべになる。

今回の教科化への経緯の中、「読む道徳」と揶揄された登場人物の心情理解に重きを置く授業の多くに欠けていたのは、この点であると考えている。道徳的心情を育てるために、人物の気持ちを考えるのは大切なことである。しかし、この“考える”と「考える道徳」でいう“考える”の間には大きな違いがある。それは「何を」考えるかという事である。子どもが自分を見つめ、自己の生き方を考えることが道徳で考えさせなければいけないことである。人物の気持ちを考えるのは、そのための通過点にすぎない。実際、私も「今日は、登場人物の気持ちを深く考えた、いい授業だった」といった大人の声がある一方、子どもは何を学んだのかははっきりしない授業を多く見てきた。

しかし、このことは、「考える道徳」「議論する道徳」の例として挙げられる問題解決的な学習やアクティブ・ラーニングについても同じである。

これらもまた、子どもが自己の生き方を見つめるための手段の一つである。にもかかわらず、授業にこれを取り入れること自体が目標になり、道徳的な学びのない授業が多い。先日の日本道徳教育学会においても、このような現状が報告された。

では、こういった改善が必要なのだろうか？

それは、導入の改善である。他の教科においては、導入で本時のねらいや学習内容を提示することは当たり前のことである。しかし道徳では、これまであまり意識されてこなかった。中には、「導入なんて必要ない」といった考えまで見受けられた。指導者の頭にはその授業のねらいがあるだろう。しかし、子どもはそうはいかない。明示されなければ、授業のねらいは分からない。そのため、ただ教材を読み、登場人物の気持ちを考え、話し合うだけになってしまう。「自分の生き方を考える」といった、本来のねらいがあるにもかかわらず、そこに向かうための手段が授業の終着点になってしまっているのである。

そこで私は、子どもが道徳的価値を理解し、道徳性を育み、そして、自己の生き方を見つめることができる授業をめざし、子どもの中に「問い」を生み出す導入の可能性を探ろうと試みた。

2. 子どもの中に「問い」を生み出す導入

①教材のもつテーマに関連付ける導入

～3年「思いきって言ったらどうなるの？」

(光文書院)を例に～

本教材は、主人公のともこが、仲のいいあやに「日曜日にフェスティバルに行こう」と誘われる。その際に、「でも、さとみだけは誘っちゃだめ」と言われる。その後、さとみから、「私も行っていいかな？」と言われ、どうしようか悩む話である。

導入では、まず「友だちと仲よくするためにはどんなことが大切かな？」と聞いた。子どもは、優しさや思いやり、うそをつかないことなど、現時点での考えを述べた。そこで、「確かにどれも大切だね。じゃあ、みんなはどうだろうね？」と問うた。そして、「今日は、自分の心を見つめよう」と投げかけ、教材を読み始めた。

授業後には、「本当の友だちは一緒に仲間外れにすることじゃない」や「友だちの言うことと違うことをするのは勇気がいるけど、ぼくは誘いたい」と、判断力や実践意欲に関わる考えが見られた。



「思いきって言ったらどうなるの？」 板書

②前時の学びを本時の導入に生かす単元学習

～3年「絵葉書と切手」「ないた赤おに」を例に～

「思いきって言ったらどうなるの？」で学んだ友情観について、さらに深め、広げていくために、「絵葉書と切手」や「ないた赤おに」といった同じ内容項目の教材を用いて、「友だちについて考えよう」という単元学習に取り組んだ。

「絵葉書と切手」は、主人公のひろ子のもとに転校していった正子から絵葉書が届いたが、定形外で追加の料金がかかった。そのことを伝えるか伝えないかと思い悩む中、「あの正子なら、私の気持ちを分かってくれる」と決心し、返事を書き始めるといったものである。信頼し合い思い合うことの素敵さを考えさせる教材である。

導入では、「前の授業では『思いきって言ったらどうなるの？』というお話をもとに、自分の心を見つめて、友だちと仲よくすることについて考えたね。じゃあ、今みんなは、友だちってどんな人だっているの？」と、前時を通して学んだ友だち観について問うた。その上で、「今日は、友だちについて考えてみよう」と展開に入った。

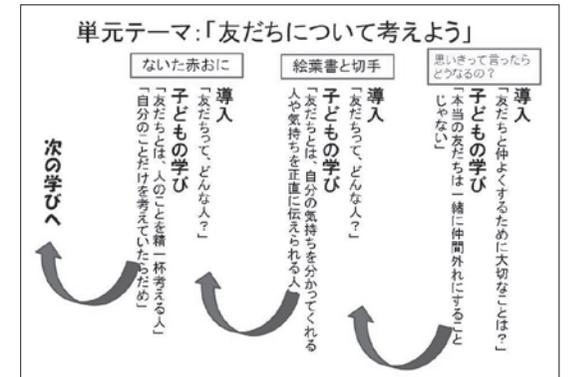
授業後には、「友だちとは、自分の気持ちを分かってくれる人や気持ちを正直に伝えられる人」といった友だち観や、「自分もそんな人でいたい」と

といった考えが見られた。

そして、これらの学びを「ないた赤おに」を使った授業の導入へとつないだ。この教材も友だち関係について考えるものである。しかし、「こうはありたくない」と子どもには悪いモデルにしてほしいという違いがある。

そこで、導入で前時の学びについて出し合い、その後、「今日も、友だちってどんな人なのかを考えよう」と投げかけた。

子どもは、前時で獲得した「自分の気持ちを分かってくれる人」や「気持ちを正直に伝える人」といった考えをもとに話し合った。その中で、「赤おには自分のことばかりで、青おにの気持ちを分かっている」や「青おにも自分の本当の気持ちを伝えていない」といった問題点を明らかにしていった。そして、「人のことを精一杯考えよう」「自分の事だけを考えていたらだめだな」といった、判断力に関わる意見をもつに至った。



3. 終わりに

本稿では、道徳の教科化に向けて我々に求められていることが「ねらい」の明確化であることと、そのために、導入を改善する重要性について述べた。また、具体的な事例として、①教材のもつテーマに関連付ける導入と②前時の学びを本時の導入に生かす単元学習の2つを、実践をふまえて提案した。

道徳が教科化されても、子どもの道徳性を育てることや自己の生き方を見つめさせるという目標は変わらない。「これまでの道徳に一体何が欠けていたのか？」という問いを自らに課し、問題意識をもつことを、今、我々は求められているのではないだろうか。

「楠井さんの思いと児童の学びをつなぐ」

—5年「助け合い傘」の実践を通して—



埼玉県和光市立広沢小学校 古見 豪基

1. 資料「助け合い傘」(光文書院・5年)について

大阪府堺市の南海高野線・萩原天神駅を出たところにある「助け合い傘」は、40年以上、楠井順子さんの善意で続いている。傘を借りた男性とその子どもとの会話や行動を通し、楠井さんの行為とそれに感謝しながらつなげてきた地域の「互いに支え合う思い」に気づくことができる資料である。



<実際の板書>

2. 授業のねらい

内容項目2-(5) 尊敬・感謝に照らして、「みんなのために活動している人たちの心は、どんな心だろう?」という子どもたちが設定したテーマをもとに「自分は多くの人に支えられて生きていることが分かり、それに感謝し、応えようとする。」というねらいを設定した。

3. 「デジタル道徳」を活用した授業の実際

(1) 動画について

「デジタル道徳」の中の「助け合い傘」の動画には、楠井さんのインタビューが収められている。楠井さんの「助け合い傘」に対する思いや、楠井さんからのメッセージによって、この資料のテーマについて深めることができる。

(2) 視聴のタイミングと効果

子どもたちは、テーマについて資料を通じて考えていく中で、以下のことを学習した。

- ・自分と地域の人々をつなぐ「もと」になる心が感謝だと分かった。
- ・感謝の心は人の心に伝染していく。
- ・町全体がまとまり、助け合う心が広がっていく。

学習したことをまとめた上で、動画を視聴した。「みなさんも誰かを支えたり、助けたりすることができるかもしれません」という楠井さんのメッセージで、改めて本時で学んだことと自分を重ねて考えることができた子どもも多かった。自分の身近なところでこのような心を使った活動をした

いという意見が、子どもたちから自発的に出てきた。

資料で楠井さんの「助け合い傘」に対する思いを学び、さらに、動画で別の視点から問いかけたり、メッセージを送ったりすることで、子どもたちは価値観を深め、思考を磨くことができた。

実話教材では、主人公の考えや行為の意味を子どもたちに伝える面でも、迫真性のある動画教材を扱うことは効果があると考えられる。

<実際の人物の思いと子どもの学びを結ぶ>

本学級では、宿題として、授業で学んだことを自分の生活と重ね、改めてノートに書いて振り返る学習をしている。その中で以下のような記述があった。

今日僕が学んだことは、楠井さんのような「感謝の心」をもつことが地域をよくすることにつながるといことです。それには、地域の人の理解や協力も必要です。僕にもできることはないかを考えました。まず地域の人とあいさつをすることやごみ拾いなどをして、みんなと楽しみながらできるといいと思いました。

後日、実践した指導案をインターネットに公開したところ、楠井さんに伝えてくださった方がおり、楠井さんから感謝のお手紙を頂いた。その手紙を子どもたちに紹介したところ、子どもたちは「やっぱり感謝の心は本当に伝染していくんだね」と、自信たっぷりの笑顔で話していた。楠井さんの思いと自分たちが道徳で学んだことが結びつき、子どもたちの価値観が深まった瞬間だった。

道徳授業の「落とし穴」⑥

～道徳授業の「あたりまえだけど大切なこと」～

千葉大学教育学部教授 土田 雄一



1. 「落とし穴」をふまえて授業を構成する

今回はこれまでの課題をもとに、道徳の授業構成のしかたについて、ポイントを明確にしたい。

2. 授業構成の「あたりまえだけど大切なこと」とは……

- ①「ねらい」を明確にする。
- ②「資料(教材)分析」をする。
- ③「中心発問」を明確にする。
- ④「話し合い」をどうするか。
- ⑤「終末」をどうするか。
- ⑥「板書」の構成を考える。

①「ねらい」を明確にする。

ねらいをふまえて、発問、話し合い等の授業構成を検討するのであるから、道徳授業に限らず、各教科の授業においても「あたりまえだけど大切なこと」である。よって、学習指導要領の内容項目をなぞるのではなく、「1時間の授業で達成するねらい」を明確にして設定する。

②「資料(教材)分析」をする。

使用する資料(教材)は、どのような構成になっているのか、どこで考えさせるのか、押さえておくべき点はどこか等を検討する。

また、子どもの視点に立って考えるためにも、「声に出して3回読む」ことをお勧めする。声に出して繰り返し読むことで、その内容やポイントがより明確になる。

③「中心発問」を明確にする。

中心発問は「開かれた発問」がよい。「主人公は、なぜ～したのだろう」「どうして主人公は～と考えたのだろう」等のように理由を問うものがよい。

「Aですか? Bですか?」のように「二者択一型」の閉じられた問いもあるが、その際には「選択した理由」をあわせて聞くことがポイントとなる。この理由こそが道徳において最も大切な点であり、ねらいと深く関連するものである。

また、理由を聞くように意識すると「なぜそう

思ったの?」「もう少し詳しく教えて」等の問い返しができるようになる。

④「話し合い」をどうするか。

授業で挙手が多い場合、教師は1人を指名し、発表させる。それが終わると別の子に発表させる。3～4人に聞いて、教師が板書をする。実は、板書の間に「子ども同士のかかわりがいい授業」は珍しくない。教師と子どもはかかわっているが、子ども同士で関連した発言がないのである。同様に、「グループで話し合いましょう」と教師が言った後、それぞれがワークシートに書いたことを発表し合って終わりという授業もあった。

これらは「話し合い」とは言えない。理由を聞いたり、類似点や相違点を確認したり、意見を聞きながら考えたことを発言したりすることが大切なのだ。自分と友達の意見を相互に関連させながら高め合うところに「話し合い」のよさがある。

⑤「終末」をどうするか。

若い教師から「終末をどうしたらよいか」と質問されることがよくある。「教師の説話」をどうするか悩むという。当然のことだが、学習のまとめ、ふり返りは子どもの言葉でまとめることもあるし、余韻を残して終わることもある。導入時の考えと比較して終わることもある。「教師の説話」は終末の手段の一つである。

⑥「板書」の構成を考える。

板書は何のためにあるのか。板書は、子どもたちが授業の中で資料(教材)を通して考え、学んだ貴重な足跡・記録である。この資料(教材)を活用して考えさせたいことを、どのようにしたら板書でわかりやすく伝えられるかを考えるべきである。板書は授業構成と深く関わっている。

3. おわりに

道徳授業改善の視点が、これまで連載してきた「道徳授業の『落とし穴』」である。「あたりまえだけど大切なこと」を意識することで授業が充実する。授業が変われば子どもも変わる。

子どもの言葉を生かして授業をする

「謙虚・広い心」をいかに授業するか



筑波大学附属小学校 加藤 宣行

1. 教材について

『学級新聞作り』（光文書院5年）は「謙虚・広い心」の資料である。

学級新聞を作る際、黒羽さんが事前の約束と違う記事作りを始める。清水さんは事前に決めたとおりにすることを主張する。黒羽さんの考えを認めるか、決めたとおりにするか、責任者の「わたし」は判断に困ってしまう。

2. 展開

●一般的な問題を考える

人と人がうまくやっていくために、必要なことは何でしょう。

- ①お互いのことを認め合う
「ごめん」「こっちこそ」
- ②賄賂を使う
「これでどうにか……」
- ③笑顔で勝負
「いやあ、どうも（笑）」
- ④相手の意見を分かり合う
「なるほど、そういうことね」
- ⑤ゆずる
「どうぞどうぞ」
- ⑥二人の考えを合わせる
「合体！」

●資料を読んで、具体的な問題として考える

「わたしたち」と「黒羽さん」、正しいのはどちらでしょうか。

- ・それは「わたしたち」でしょう。
- ・だって、みんなで話し合ってそうしようと決めたことなんだから。
- ・「黒羽さん」は途中まで、“それでいい、賛成”と思っていたけれど、もっと面白い新聞を作り

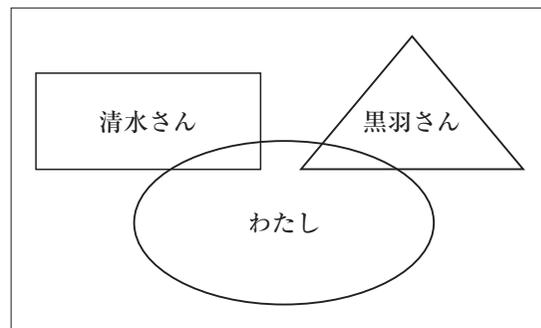
たいと思っていたら、別の案を思いついた。

みなさんが考えた方法でうまくいくでしょうか。

- ・①だと、「そうだね、それもいいね」「こっちこそ、わがまま言ってごめん」となって、結果が出ないかなあ……。
- ・②はあり得ないでしょう。「もっとちょうだい」とエスカレートしてしまうかも。
- ・③は、本心では納得していないのだから「作り笑顔」になってしまうかも……。
- ・④も①と同じで、どっちつかずになってしまうかな。
- ・⑤は、最初の約束の意味がなくなってしまうし、自分の考えが生かされない。
- ・⑥は、意味もなく合わせるだけでは、ただの多数決みたい。
- ・う～ん、どうしたらいいのかなあ。

「わたし」と「清水さん」の違いは何でしょう。

- ・「清水さん」は、決めたことなんだからもう変えられないと思っている。
- ・「わたし」は、決めたことは守らなければいけないけれど、「黒羽さん」の考えにも一理あると思っている。



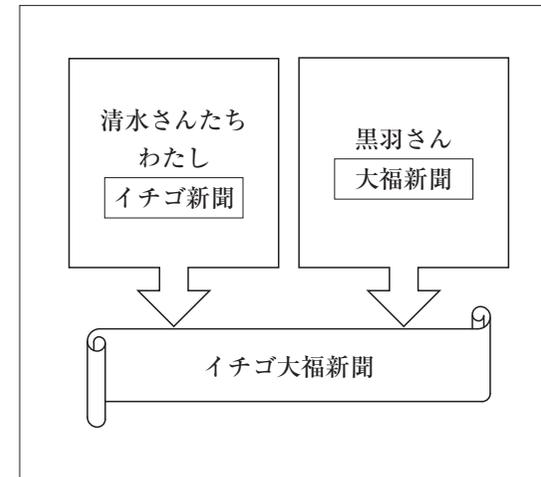
○「わたし」は、広い心で両方のよさを認めているのですね。

・そうそう、「イチゴ大福」!

○え? 「イチゴ大福」?

・わかった。④と⑥を合わせればいいんだ。

○なるほど、「わたし」や「清水さんたち」が作ろうと話し合ったのが「イチゴ新聞」で、「黒羽さん」が作りたいと言いだしたのが「大福新聞」なんだね。



この発言を聞いたとき、私自身も思わず「なるほど!」と納得してしまった。このように子どもたちの具体を通した言葉は、授業の思考を飛躍的に深めたり、広げたり、促進させたりする力をもつ。当然のことながら、そのような言葉は子どもたち同士に響きやすい。時には大人が頭で考えるどんな立派な言葉よりも説得力がある。

よりよいものを作るため（よりよい共同社会を構築するため）に大切なことは何だろう。今日の学習から考えてみよう。

- ・お互いの意見を主張し合って、言い争うのではない。
- ・お互いの意見を分かり合って、自分の意見を譲ることもない。
- ・お互いの意見を認めた上で、自分の考えも加えてよりよくしていく。
- ・④と⑥を合体させればいいんだ!
- なるほど、「イチゴ」のよさも「大福」のよさも入れながら、両方のよさが生きるようなものを作るということですね。

キーワードでまとめましょう。

・お互いのことを認め合う。

相手の気持ちを分かり合い、意見を認め合える心を「寛容」と言います。

○そのような、「寛容」な心で何かをすると、どんなよいことがあるでしょう。

・お互いのよいところを認め合い、伸ばし合いながら、もっとよいものを作ることができる。

○今日のみなさんも、友達の意見を取り入れながら、ますますよい考えを導き出していましたね。

3. 考察



何といたっても「イチゴ大福」という表現は圧巻だった。このような発言を引き出すことができた要因のひとつは、板書の工夫だと考えている。上の写真のように、板書には図解して比較させる要素を幾つも取り入れた。このような図解をすることによって、構造がひと目で分かり、子どもたちの理解を促進させていることは確かである。

4. まとめ

子どもたちの言葉を生かすというのは、子どもの発言をそのまま使うということではない。発言の意図を汲み、必要に応じて補足したり問い返しをしたりするので、簡単そうに見えて実は難しい。予定していたとおりにはいかないので、不安に思われるかもしれないが、だからこそ面白いのである。少しばかりの勇気と、周到な価値分析があれば、その醍醐味を味わうことができる。ぜひチャレンジしていただきたい。

道徳の教科化に伴い、最近よく話題になるのが「問題解決的な学習」という言葉である。「問題」とは何か。今後、さまざまな議論・実践がなされていくことだろう。今回紹介した授業も、ある意味、問題解決的な授業として位置づけてもよいのではないかと考えている。